

| | | |
|-------------|----------|----|
| 群 教 セ | H01 | 01 |
| | 平16.221集 | |

身近な環境に自分からかかわり 夢中になって遊ぶ幼児の育成 身近な自然物との触れ合いにおける環境の構成の工夫

特別研修員 角田 映子 (前橋市立宮城幼稚園)

《研究の概要》

本研究は、身近な自然物との触れ合いにおける環境の構成の工夫をすることで、身近な環境に自分からかかわり、夢中になって遊ぶ幼児を育成しようとするものである。具体的には、発達時期に応じた身近な自然物との触れ合う姿を捉え、自分から遊び始め、気に入った遊びにこだわり、自分のしたい遊びを繰り返して楽しむようになるような環境の構成の工夫を明らかにしたものである。

【キーワード：幼児教育 意欲的にかかわる 夢中で遊ぶ 身近な自然物 環境の構成の工夫】

主題設定の理由

今日の幼児の生活をみると、少子化のため大人に依存して生活している幼児が増えている。また、ゲームをする、ビデオ、テレビを見るなど、家の中での遊びが多くなっているため、戸外で遊ぶ経験が少なくなっている。幼稚園教育要領において、幼児期に身近な環境にかかわり、様々な活動をする中で充実感を味わうという体験が重視されることを考えると、幼稚園生活で身近な環境に自分からかかわる意欲をはぐくんでおく必要がある。また、幼児が身近な自然物に触れ合うことは、豊かな感情や好奇心、思考力や表現力の基礎の形成につながるため、幼児期に必要な経験である。身近な自然物との触れ合いにおいて、幼児が自分から遊び始め、気に入った遊びにこだわり、自分のしたい遊びを繰り返して楽しむことで、身近な環境に自分からかかわり、夢中になって遊ぶ意欲的な幼児が育成できると考えた。

本学級は、3年保育3歳児、23名の学級である。保育園経験がある幼児が1名いるが、他22名の幼児は初めての集団生活であるため、入園当初泣いて登園してくる幼児が多かった。そんな時、園で飼育しているうさぎを見たり、草花や虫などを見たりすることで気持ちが和んでいった。このことから3歳児の幼児が安心して園で過ごすようになる為に、身近な自然物と、多くの触れ合いをして欲しいと願っている。本園は、花壇や芝生、観察池や飼育小屋などがあり、自然環境に非常に恵まれている。このような恵まれた自然環境を教師が与えることで興味を示すが、幼児が自分からかかわり遊ぶ姿はあまり見られない。また興味を示してもすぐに飽きてしまう幼児も多い。

今までの保育を振り返ってみると、恵まれた自然環境が身近にありながら、幼児が自分からかかわり夢中になって遊べるような環境の構成の工夫をすることが少なかった。そこで、本研究では身近な自然物との触れ合いに視点をあてて、発達時期によって必要な経験は何か、それにはどんな環境の構成の工夫が必要なのかを明らかにすることにより、身近な環境に自分からかかわり、夢中になって遊ぶ幼児を育成したいと考え、本主題を設定した。

研究のねらい

身近な自然物に出会う、触れる、かかわりを深めることができるような環境の構成の工夫をすることで、身近な環境に自分からかかわって、夢中になって遊ぶ幼児が育成できることを実

践を通して明らかにする。

研究の見通し

- 1 安心して生活する時期では、自然物に対する幼児の興味を探り、身近な自然物に出会えるような環境の構成の工夫をすることで、幼児が自分から遊び始めるようになるであろう。
- 2 したい遊びを見つける時期では、いろいろな身近な自然物に触れて遊びを広げることができるような環境の構成の工夫をすることで、幼児が自分の気に入った遊びにこだわるようになるであろう。
- 3 遊びを楽しむ時期では、身近な自然物に自分からかかわり、かかわりを深めることができるような環境の構成の工夫をすることで、幼児が自分のしたい遊びを繰り返して楽しむようになるであろう。

研究の内容と方法

1 研究の内容

(1) 身近な環境に自分からかかわり、夢中になって遊ぶ幼児について

幼児は頼れる教師や興味のある身近な環境に出会うことで、自分から遊び始める。いろいろな身近な環境に触れて遊びを広げること、自分の気に入った遊びにこだわるようになる。一度やって楽しいと感じた遊びには、自分からかかわり、何回も繰り返して楽しむようになる。以上のような幼児を、身近な環境に自分からかかわり、夢中になって遊ぶ幼児ととらえた。具体的な姿を次に挙げる。

身近な環境に出会い、自分から遊び始める幼児

- ・教師がそばにいて安心して遊んでみようとする。
- ・遊ぶことに興味をもち、教師と一緒に遊びたがる。また、教師や友達の遊びを真似することを楽しいと感じ、自分から遊び始める。

身近な環境に触れて遊びを広げ、自分の気に入った遊びにこだわる幼児

- ・いろいろな遊びがあることを知り、楽しそうな遊びをやってみようとする。
- ・自分の気に入った遊びや物にこだわり、常に遊びたがったり大切にしたりする。

身近な環境に自分からかかわり、かかわりを深め、自分のしたい遊びを繰り返して楽しむ幼児

- ・楽しいと感じたことを教師や友達に伝え、共感してもらおう事でもう一度やろうとする。
- ・自分から遊びに取り組み、何回も繰り返す。

(2) 身近な自然物との触れ合いにおける環境の構成の工夫について

身近な自然物とは、幼児の周りにあり、いつでも見つけたり、触ったりできる物であり、具体的には虫、葉っぱ、飼育物などである。幼児が身近な自然物と触れ合えるようになるために、教師は幼児の興味や発達に添って物を提示する、場を設定する、遊ぶ時間をとる、などをする。更に幼児の遊び方に応じて援助を重ねていく。このことを環境の構成の工夫であるにとらえた。また、教師の動きや幼児とのかかわりも環境の一つであると考え、本研究では身近な自然物と触れ合う姿を「出会う」「触れる」「かかわりを深める」ととらえ、それぞれにおいて次のような環境の構成の工夫をしていく。

| | | | |
|----------|---|--|--|
| | 身近な自然物に出会えるように (見通し1) | 身近な自然物に触れられるように (見通し2) | 身近な自然物に自分からかかわり、かかわりを深められるように(見通し3) |
| 環境の構成の工夫 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 幼児の自然物に対する興味を把握し、幼児と一緒に身近な自然物を見つけたり、様子を見たりする。 ・ 身近な自然物に気付けるような言葉掛けをしたり、自然物の提示をしたりする。 | <ul style="list-style-type: none"> ・ いろいろな身近な自然物に触れる機会をもつなかで、教師が身近な自然物に触れる姿を見せたり、幼児が触れることができるように虫や小動物を飼育したりする。 ・ 自然物に対する幼児のこだわりをとらえ、教師も一緒にこだわってみる。 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 幼児が取り組んでいる遊びに変化をつけたり、幼児の遊び方によっては形を変えたりする。 ・ 幼児と一緒に遊びの楽しさを伝え合ったり共感し合ったりする。 ・ 遊びに必要な材料を準備する。 ・ 幼児の遊びや動きに応じて遊ぶ時間を配分する。 |

2 研究の方法

研究の見通しに基づき、以下の計画で保育実践を行い、検証する。

(1) 実践計画

| | |
|----|------------------------------------|
| 対象 | 前橋市立宮城幼稚園 3年保育3歳児 23名(男児11名 女児12名) |
| 期間 | 平成16年5月～10月 |

(2) 検証計画

| 検証項目 | 検証の観点 | 検証の方法 |
|------|---|---|
| 見通し1 | 安心して生活する時期に、身近な自然物に出会うことができるように、幼児の興味のある身近な自然物を提示して、一緒に見たり見つけたりしたことは、自分から遊び始めるようになることに有効であったか。 | 教師の観察法。以下のことを観察法の視点とする。 |
| 見通し2 | したい遊びを見つける時期に、いろいろな身近な自然物に触れて遊びを広げることができるように、いろいろな身近な自然物に触れる機会をもったり、幼児と一緒に身近な自然物を探して飼育したりしたことは、自分の気に入った遊びにこだわるようになることに有効であったか。 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 表情・行動・つぶやき ・ 教師との会話のやりとり ・ 幼児同士の会話 |
| 見通し3 | 遊びを楽しむ時期に、身近な自然物に自分からかかわり、かかわりを深めることができるように、幼児が楽しんでいることと、幼児の興味を結びつけた遊びを提供したり、幼児と一緒に楽しさを共感し合ったりしたことは、自分のしたい遊びを繰り返して楽しむようになることに有効であったか。 | <ul style="list-style-type: none"> 他の教師からの情報 家庭との連携の中から推測する幼児の姿 以上のことから、幼児の変容をとらえ、分析する。 |

研究の展開

3歳児の教育課程1期、2期、3期に沿って幼児の発達の時期と実態を把握しながら、「身近な自然物との触れ合い」に視点をあてて、次に示す具体的な環境の構成の工夫をしていくことでその有効性を明らかにする。(3歳児の教育課程1期、2期、3期については、資料編参照)

身近な自然物との触れ合いにおける具体的な環境の構成の工夫

| | 安心して生活する時期 (見通し1) | したい遊びを見つける時期 (見通し2) | 遊びを楽しむ時期 (見通し3) |
|----------|---|--|--|
| 環境の構成の工夫 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 一人一人の幼児の自然物に対する興味を把握し、遊びのなかで興味のある自然物を提示する。 ・ 幼児と一緒に、草花を摘んだり、虫を見たり見つけたりする。 ・ 幼児と一緒に、うさぎや金魚の様子を見る。 ・ 草花の世話をしたり、摘んだりする場を設定する。 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 遊びのなかでいろいろな身近な自然物に触れる機会をもつ。 ・ 虫や小動物を飼育する機会をもち、一緒に世話をしたり、様子を見たりする。 ・ 身近な自然物への自分のこだわりを言ってくる幼児と一緒にじっくりかかわったり、身近な自然物を探したりする。 ・ 幼児が家庭から持って来た物には教師自ら驚いたり、受け入れたりし、興味を示す。 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 草花の種や落ち葉や枝など幼児が自分から見つけたり集めたりできるように、幼児が楽しんでいる「宝の地図」に自然物を描き加えて提示する。また、幼児の遊びの様子に応じて、更に描き加えていく。 ・ 何回も繰り返して遊ぶ様子が見られた時には、声を掛けずに見守ったり、遊びの楽しさを共感したりする。 ・ ポリ袋や空き容器を幼児が自分で取り出せるような場所に用意しておく。 ・ 身近な自然物に繰り返しかかわれるように、十分時間をとる。 |

研究の結果と考察

- 1 安心して生活する時期に、身近な自然物に出会うことができるように、幼児の興味のある身近な自然物を提示して、一緒に見たり見つけたりしたことは、自分から遊び始めるようになることに有効であったか

《泣かないぼく》

5月：A児が泣きながら登園してきた。手には花をにぎっている。「今日はお花を持って来たの。」と教師が聞くと、A児の母親が「虫さんも連れて来たんだよね。」と言う。教師が「どこ？」と花を覗いてみると、A児は泣き止み、花をじっと見つめ、「ここ。」と虫を指し教師に教える。教師が「ちっちゃいね。よく見つけたね。」と言うと、「うん。」とうなずき再び小さな虫をじっと見つめていた。A児は虫に興味があることを見取ったので、一緒に虫を見ることができるよう、花壇のノースポールを二株抜き、バケツに入れて保育室前のテラスに置いておく。

翌日、数人の幼児と一緒にノースポールの花摘みをしていると、A児が泣きながら登園して来る。教師が、A児に「今日はお花を摘んでいるの。昨日、A君が連れて来たみたいなおちっちゃい虫がいるかな。」と伝えると、A児も花摘みを始める。A児が小さい花を見つけ、「見て、ちっちゃいよ。」と言ってきたので、教師は「本当だね。A君みたい。」と答えた。A児は「うん。これは泣かないぼく。」と答え、再び花摘みを続ける。しおれかかった花を摘んで、「これは泣いているの。」とA児が言ったので、教師が「どうして泣いているの？」と尋ねると、「先生がぼくのこと心配してるの。」と答える。

翌朝、A児が泣きながら「また虫さんいる？」と聞いてくる。教師が「いるかな？一緒に探してみようか。」と答えると、A児は、昨日花摘みをした場所へ自分から行き、花を覗き込んで探している。教師が「ここに何かいるよ。」とアリを指差すと、「アリだ、アリ。」と言ってA児の足元周辺を探し始める。「ここにもいる。あっ、ここも。」と言いながら、アリの動きを追いかけ、教師に「僕、ダンゴムシさんが好きなんだ。あとカミキリムシ君もヤスデちゃんもみんな好き。」と伝えてくる。教師が「ダンゴムシ好きなの。幼稚園にもダンゴムシいるかも。」と言って、花壇の間を探し「あっ。」と声を出すと、A児は覗き込み大きな声で「ダンゴムシさんだ！」と言って、さっそく自分の手で芝生を掻き分けてダンゴムシを見つけ始める。その後、毎日「先生、ダンゴムシ探そうよ」「みつけたよ」と言いながら虫を探して遊ぶことを楽しみに登園するA児の姿が見られるようになった。

以上のことから、A児の花や虫への興味を把握して、ノースポールをバケツに入れてテラスに置いておいたり、A児にじっくりとかかわったり、A児と一緒に花摘みをしたりしたことで、A児がアリやダンゴムシを探して遊ぶことを楽しみに登園するようになったと思われる。また、A児の言った「泣かないぼく。」「先生がぼくのこと心配してるの。」などの言葉から、A児は教師に対して信頼してきており、安心して遊びに気持ちが向くようになったと思われる。

このように、幼児の興味のある身近な自然物を提示して、一緒に見たり見つけたりしたことは、身近な自然物に出会うことができ、幼児が自分から遊び始めるようになることに有効であったと考える。

- 2 したい遊びを見つける時期に、いろいろな身近な自然物に触れて遊びを広げることができるように、いろいろな身近な自然物に触れる機会をもったり、幼児と一緒に身近な自然物を探して飼育したりしたことは、自分の気に入った遊びにこだわるようになることに有効であったか

《アリエルを探しに行こうよ》 「アリエル」とはディズニーの物語に登場する人魚である。

6月：アリエルを探しに行こうと言ってきたB児と、数人の幼児と一緒にアリエル探しの遊びを始める。園庭を行ったり来たりして「アリエル！」と呼んだり、年長児や他の教師に「ア

リエル知らない？」と尋ねたりしている。

翌日、B児が「アリエルを探しにいこうよ」と教師を誘ってくる。B児の要望を聞いて教師が、「今日はいろんな所を探しに行こうよ。」と提案する。幼児達は「どこ？」とすぐに興味を示してくる。うさぎ小屋に行き、「うさぎさん、アリエル知らない？」とうさぎに話しかける。幼児たちが小屋に行ったことでうさぎが近くに寄ってきたので、「かわいいね。」「ミフィーはどれ？」などといろいろな会話をしながら、しばらくの間観察をする。

トンネル山では「アリエル！どこ？」と呼びながら石段を登ったり、トンネルをくぐったりを繰り返す。教師が、トンネル山に植えてあるつつじの葉を摘んで服に貼り付けると「魔法みたい。」「魔法の葉っぱ。」と言いながら、服や顔に貼り付けて遊んだ。

トンネルを出た先の池でも、「アリエル！」と池に向かって話しかける。B児が「今日は金魚さん、かくれているね。」と言うと、保育室でしている「さくらんぼ」というかくれんぼ遊びの手遊びを思い出して皆で歌う。「もういいかい。」「もういいよ。」と保育室と同じようにやりとりをしていると、一匹の金魚が水草の陰から出てくる。「わぁ！でてきた！」「みつめた。」「みつかった。」「もういいかい。」「もういいよ。」と言葉のやりとりを続けると、再び一匹の金魚が出てきて、偶然の金魚の動きに喜んでいた。B児はその後も毎日教師と数人の幼児を誘い、うさぎ小屋、トンネル山、池へ行き、アリエル探しの遊びを楽しんだ。

《カブトムシが欲しい》

7月：保育室で飼育しているカブトムシの幼虫の世話をしながら、幼児と一緒に観察する。特にC児がカブトムシに興味を示し、毎日「もうカブトムシになる？」と教師に聞いて来ては観察する姿が見られた。

一人の幼児が、カブトムシを持って登園して来る。カブトムシを持って来た幼児にC児が、「ちょうだい。」と頼むが断られ、「僕も欲しい。」と泣きながら教師に言って来る。教師は「C君も欲しいよね。一緒に探してみようか。」とC児と一緒に園庭に出る。桜の幹を見て、「ここにいるかな。」「これカブトムシが食べる蜜だよ。」「え、本当？」「お兄ちゃんが言った。」「この穴カブトムシの家かな。」など会話をしながら探したが見つからなかった。その後、数日間C児と一緒にカブトムシを探す。

数日後、C児が数匹のカブトムシを持って登園し「先生、見て！」と、嬉しそうに言ってきた。「どうしたの？」と驚くと、「おばあちゃんが捕ってきてくれたの。」と大きな声で説明をする。教師は「大好きなカブトムシが見つかってよかったね。」と嬉しさを共感する。C児は、毎日カブトムシを持って登園し、友達と見せ合ったり触ったりして遊んでいた。

ある日、一匹のカブトムシが死んでしまい、教師が「死んじゃったね。かわいそうだね。」と言うと、C児は何も言わずに死んだカブトムシを見つめていた。その後、死んだカブトムシをケースにしまい、生きたカブトムシと一緒に飼育していた。教師はC児の姿を見守った。

以上のことから、アリエルを探したいというB児のこだわりに応じて、うさぎ小屋、トンネル山、観察池のコースを設定してアリエル探しの遊びをしたことで、うさぎ、魔法の葉っぱ、金魚などのいろいろな身近な自然物に触れることができ遊びが広がった。また、カブトムシが欲しいというC児の思いに教師も一緒にこだわり、根気良く探したり、死んだカブトムシを飼育し続ける姿を見守ったりしたことで、カブトムシに触れ大切にすることができたと思われる。

このように、いろいろな身近な自然物に触れる機会をもったり、幼児と一緒に身近な自然物を探して飼育したりしたことは、いろいろな身近な自然物に触れて遊びを広げることができ、自分の気に入った遊びにこだわるようになることに有効であったと考える。

- 3 遊びを楽しむ時期に、身近な自然物に自分からかわり、かわりを深めることができるように、幼児が楽しんでいることと、幼児の興味を結びつけた遊びを提供したり、幼児と一緒に楽しさを共感

